

1957年モスクワ平和友好祭

——ある日本人参加者の思い出（上）——

半 谷 史 郎

1957年のモスクワ平和友好祭は、ソ連文化史で特筆される一大イベントである。長らく「鎖国」状態にあったソ連が、1953年のスターリン死去と56年のスターリン批判を経て旧来の方針を転換し、131カ国から3万4000人も外国人を二週間にわたって受け入れた。ソ連の庶民が外国人と直接ふれあったほぼ初めての体験であり、ジーンズやロックに象徴される西側の最先端の文化がもたらされたことでも有名である。

今ではほとんど忘れられているが、この祭典には、前年末に国交を回復したばかりの日本からも150名余りの若者が参加している。その一人が、長崎^{まひと}眞人さん（1927年生まれ）である。本論では2015年10月30日に町田市の喫茶店でうかがった長崎さんの貴重な体験談を、二回に分けて紹介したい。本号では、民青同盟神奈川県委員長としての活動、平和友好祭の代表に選出された経緯、船とシベリア鉄道を乗り継いでモスクワに到着するまでの様子が語られる。文中のQは半谷、Aが長崎さんである。

なお著書の自分史、『命ある限り』（光陽出版社、2007年）の関連箇所は文中に〔p.**〕と注記し、また最低限の補足説明を施した。

Q：お茶が来てからぼちぼちというつもりではおります。

A：私を見つけたのはどこからですか。

Q：この間の日曜日ですが、インターネットで平和友好祭のことを調べていると、事務所のホームページ¹⁾にこれ〔自分史〕がまだ残っていました。事務所の連絡先が書いてあったので、まだご存命ならと思い、話を振ってみたところトントン拍子になりました。

A：当時の私の仲間、同年輩の連中も随分亡くなりました。だから、生き残りという感じですよ。

Q：一番若い人で82～83ですけども、今のところ4人にお話のうかがえしました。

A：私の印象としては、あの平和友好祭というものはソ連邦の一番華やかな、ピークになったところではないかと思います。要するに日本との関係でも、あの平和友好祭に参加する運動が青年運動のピークでした。それぐらい日本の青年運動にとっても一番華やかな時期でした。私は、民青で神奈川県副委員長をしていたんですけども、派遣された当初〔1952年〕は、ほとんど大した組織はありませんでした。いわば、レッドパージの余波を受けた時代です。

Q：組織がガタガタになって、再建しているときですね。その辺は本を読んでよく分かりました。

A：そこにビキニの水爆です〔1954年3月1日〕。あれを契機として原爆廃止の平和運動が世間一般に広がりました。その一番先端を私たち民青が承りました。どんどんと署名運動だとか、あるいは、他の諸団体に呼び掛けて、いわゆる統一戦線に広げるという役を果たしたのです。

そこへ平和友好祭という話が来ました。一番動いていたのは、日青協という、日本青年団体協議会です。日青協のメンバーとは全然縁がなかったのですが、参加してくれと。それから、労働組合は、まだ総評と地評、産別の争いが残っていた時期ではあったのだけれども、総評系は全面的に応援することになって、神奈川県では神奈川県評の青年部が中心になって、県職だとか市職、あるいは国鉄というような、神奈川県下の主要な労働組合がほとんどみんな参加してくれました。

その素地になったのが、水爆です。私は水爆を契機にして、県外の青年組織をしらみつぶしに歩きました。ほとんどが労働組合の系統に関係なく、名前のある労働組合は全てしらみつぶしに歩きました。

それから、青年団の類いも残らず手紙を出して、その返事が来たところは全部、足で歩くというようなことをやってその大会を開きました。

Q：その神奈川大会はこの写真ですか〔p. 230〕。

A：そうです。これは、いわば私が足で稼いで組織したということです。それだけ水爆実験の影響が非常に社会的に大きかったのです。今で言えば、アベノ

ミクスや戦争法案が社会的な影響を持っているのと似たようなことでしょうか。もともと、私の民青や、あるいは共産党などは脇へ置かれていました。まともに弾圧を食らったということが一番の根本で、その再建途上にあったのが、そこに神風が吹いたような話でした。その水爆反対の運動の素地があったところに、世界民青連から世界友好祭の呼び掛けが来たわけです。

Q：私の方の調べた記録では、日本には情報自体は57年の1月ぐらいに入ってきて、各方面に回しだしたのが春。3月、4月ぐらいから協力要請の文章が回っています。大会をやること自体は56年、前年の夏にモスクワ開催が決定して動き出すのですが、話が日本に入ってきたのは57年の春かなと思います。

A：恐らくそうだと思います。

Q：先ほどの横浜の大会はいつ開かれたのですか。

A：これは前年ですね。まだ平和友好祭と関係なく、水爆反対の運動として盛り上がったわけです。その盛り上がりの中に平和友好祭の話が飛び込んできたわけです。

Q：この水爆の大会の人脈を使って、割と簡単に乗って人が集まったわけですね。

A：そうです。水爆実験だけでは集まり切れませんでした。主要な労組はみんな水爆実験の運動に参加してくれて、平和運動として盛り上がるころまで来ていましたけれども、例えば青年団の人たちや、あるいは文化団体の関係などは、この平和友好祭で熱が上がって、行きたいということで、むしろ運動としてというよりも、モスクワへ行きたいという雰囲気ですね。

Q：やはりその頃、外国は遠かったですか。

A：恐らく、まだその後だいぶたってからでしょう、旅行で観光に行くなどということとは。

Q：海外旅行の自由化は1964年なので、あと7～8年あります。

A：私の記憶では、僕らの団体としては、世界的な青年組織である世界民青連などに日本の民青から参加して、常駐メンバーもいました。

Q：しかし、それは合法ではなく、密航で行っていますね。

A：そうです。そういう時代ですから、旅券が出たのは私たちが初めてです。

Q：国交回復が56年の12月なので、回復直後ですね。

A：当初、この派遣運動の実行委員会ができて500名の代表団を送ろうと外務省と交渉をしますが、最初は全く拒絶でした。

Q：逆に言うと、500名を打ち出した時に行けると思っていましたか。500人の名簿は、記録では6月ぐらいに提出しているようですが。

A：私自身は参加する気は全然ありませんでした。運動として盛り上げるということでした。

Q：責任上入っているということですか。

A：そうです。派遣委員会のメンバーも、みんないろいろです。私は原水爆禁止の運動で人脈を作り上げ、そのリーダー格に座っていましたから、私が主導権を握って派遣運動をやっていましたし、中央との連絡も私が取っていました。恐らく、その他に集まってきたメンバーは、労働組合の関係にしろ、青年団の関係、文化団体の関係、どの方々もそのような運動の経験がほとんどありません。要するに、行きたいやまやまで参加してきたという感じの方々でした。

Q：モスクワに行くときは、お金を向こうが持つという話も付いていましたね。

A：そうです。

Q：単に500人のビザを出すだけではなくて、滞在中のお金も出すと。

A：招待というかたちでした。だから、その当時で言えば、海外へ出ること自体がまだ。

Q：考えられない時代ですからね。

A：まして日本の青年団体が500名というような数にしろ、1人2人にしろ、招待を受けて参加するなんて、もう降ってわいたような話で、うわっと集まるわけです。

Q：集まるでしょうね。行けるなら何でもいいやと……。確認しますが、57年のモスクワの前に平和友好祭が東欧の国々で、55年にワルシャワ、53年にブカレストとやっていますけれども、そちらに行った人はいますか。

A：います。

Q：そのような話は聞いていらしたのですか。

A：これは民青が主体ですけれども、全て非公然ですから、いわばそのような特殊なメンバーが参加する場所でした。

Q：実際にお知り合いの方でいましたか。

A：あります。ほとんどみんな私の仲間です。

Q：具体的にどのようなことがあったか、土産話は聞いていらしたのですか。

A：当時の状況は、派遣したら帰ってこれないのです。

Q：旅券法違反ですから、帰ってくると捕まるわけですね。

A：だから、向こうに行き放しになっていたと思います。

Q：では、噂で誰それは行っているとか、行ったとか、直接知っているわけではないということですか。

A：ただ、事実としては当然ありました。ワルシャワでどうだったという事実はあって、そして日本国内では、それを受けたかたちで私なども組織したものは、海の平和祭や山の平和祭など、いわば国内版の平和友好祭を組織して、やりました。それから、イギリスの青年組織のメンバーが世界民青連の代表ということで日本へ来て、その歓迎をやったり、そうした行事はずっと伝統的にありました。あったけれども、それは半非合法的な関係ですから、民青以外の組織には全く広がっていません。それを広げようとして、先ほど言った海の平和祭や山の平和祭など、国内版の平和友好祭をやってきたわけですが、この広がりにはモスクワのときはとは全く違って、いわば革新系の連中が平和運動に名前を借りて運動へ広げていくという雰囲気でした。

Q：それまでとは明らかにレベルが違うのですね、57年は。水爆反対の運動で今までとは違う人がたくさん集まってくるようになったわけですね。

A：そうです。これは相当大きな社会的な影響がありました。従来の革新系が半非公然で一生懸命に組織を広げていたものが、社会的に認知されるというか、うわつとその規模が広がったのが水爆反対の運動だったのです。その素地があったから、あるいは、その前に海の平和祭や山の平和祭など。

Q：これは毎年やっていたのですか。

A：定期的にやっていました。

Q：時期としては夏でしょうね。

A：そうです。

Q：例えばこのような海の平和祭や山の平和祭には、人数で言うとどれぐらい集まるのですか。

A：数百名の単位でしょうね。

Q：先ほどの原水爆の横浜大会ではどうですか。

A：千何百です。

Q：やはり一桁上がりますか。

A：はい。

Q：完全に質が違いますね。

A：集まったメンバーも、民青中心のメンバーというよりも、地評など、いわば社会党系の人たちがみんな参加してくれました。それまでの運動は、弾圧を受けた共産党が一生懸命地道に運動を広げてきたことの一環として平和運動もあったわけですが、どう見てもこれはアカの運動です、世間的には。

Q：普通の人は入ってこないのですね。そうすると、横浜の56年の大会でも労組が集まっているようですが、57年の平和友好祭の500人のときのメンバーには自民党の議員さんもいますね。

A：あれは青年団の関係です。日青協ですね。

Q：ここまで来ると、かなり幅広い、普通の人まで来る運動体になりますね。

A：私も、神奈川県下で県庁の市民部のようなところを訪ねて行って、青年団の名簿があれば見せてもらいたいと言いました。

Q：見せてくれましたか。

A：名簿をもらいました。その名簿を基に全部手紙を出して、呼び掛けました。

Q：どのぐらい返事がありましたか。

A：100を超える数を送って、戻ってきたというか、賛同を表明したものは10くらいです。

Q：1割くらいですね。まずまずですね。

A：それでも、まず思いも掛けませんでした。

Q：よく返ってきたなという感じですか。やはり原水爆禁止はそれぐらいの広

がりがあるのですね。

A：ありました。そのうち3カ所くらいは、私が直接足を運んで会ってきました。当時は農村風景も今とはまるで違う、農村青年団が生きている時代です。中には女子青年団の団長さんが会ってくれて、「どうぞうちへいらっしやい」と言われ、久しぶりにおいしいお芋を頂いたりしました。それから、厚木の少し田舎の方、酒匂川のほとりの鮎の産地なのですが、その地主さんが青年団の団長でした。

Q：農村ならそうでしょうね。

A：そこへ一泊させてもらって、捕れたての鮎をごちそうになったりしました。

Q：そのときに、身分としては民青だと名乗るのですか。

A：そうです。

Q：それに対して何か反応はありましたか。

A：これが不思議なくらいに、「どうぞ、どうぞ」となるのです。あらかじめ世界民青連の呼び掛けを手紙で出して、それに賛同の返事をいただいたところでもありますので。

Q：素性が分かっていることもあるのでしょうか。

A：それまで長い間、弾圧を受けて、地下活動でやっていた頃とはもうがらりと違う雰囲気です。

Q：やはり原水爆だからでしょうか。

A：あれが空気を変えましたね。

Q：あと幾つか話をうかがいたいのですが、500人ということで始まったものの、7月に入って500人にビザは出せないとなって、もめます。絞らなければいけないのですが、長崎さんの自分史を読んだ印象では、割と早く絞る人選が決まっていますか、7月の早い段階で。というのは、読んだ限りでは、行く人が決まって、その後、カンパをするために10日ほど走り回ったと書いてある〔p. 231-2〕。出発するのが20日前後ですから、その10日ぐらい前には決まっていたと読めたのですけれども、そうなのですか。

A：そうです。最終的に150名になって、各県ごとに割り振りました。神奈川

県は2名になったわけです。その前の段階で、行きたい人が10名くらいいました。

Q：ここに名簿があります〔『友好祭ニュース』第3号（1957年6月13日）掲載〕。

A：神奈川県青年団協議会、朝日新聞労組、横須賀生協。まだいましたね。

Q：これは500人のときの名簿です。

A：その前の希望者はもう少しありました。それを絞ってこのように〔6名〕になったのです。さらにここから2人をということです。

Q：それが7月なのですけれども、念のために時期を確認すると、外務省が150人だと言い出したのが7月12日、受諾したのが16日です。出発は19日でした。

A：7月ですか。

Q：7月19日が出発です。

A：慌ただしいですね。

Q：ただ、10日ぐらいあったと書かれていたので、もう少し早い段階で決まっていたのかなという印象を受けたのですが、どうでしょう。

A：今のこの名簿のメンバーは、500人規模で考えたものです。それを2名に絞ったのはもうぎりぎりだったと思います。

Q：やはりぎりぎりですね。他の芸術関係の方に聞いたら、絞り終わったら、その翌朝に出発したと仰っていました、東京から新潟に向けて。

A：神奈川の場合は、少なくとも2週間くらいはありましたね。

Q：ということは、事前に絞らなければいけないという話が来ていたのですか。

A：そうです。

Q：外務省はどうも出さないらしいから、絞ることを前提にやってくれということで、それが6名から2名ということですね。

A：そうです。

Q：だから、割と7月の早い段階でそのような絞りをやっていたことになるわけですね。

A：2名に絞るところは、2週間あったでしょうか。

Q：ご本の中では10日ぐらいあったと書いてありましたけれども。

A：そんなもんです。

Q：そうすると、7月初旬にはもう2名を確定していることになります。

A：そうですね。

Q：少し他とはズレていて、早い絞りですね。

A：そうかもしれないですね。というのは、今言ったような運動の素地が他の地域とは比較にならないくらい早くでき上がっていたので、私が主導権を握ってピシピシと話を決めることができたわけです。他は、民青のニュースに出ています。この水爆実験の運動の後に、平和友好祭というかたちで県大会を行いました。これ [p. 227] がそうですね。

Q：これが神奈川大会ですね。これは54年の8月です。このような地方大会をやっていたのですね。

A：このようなことができていたところは、全国的にも非常に珍しいケースでした。こうした素地があったから話がしやすかったですし、まとまりやすかったのです。話としても、労働組合関係と、青年団の関係と、それから私の民青の関係と、この3者が大きなグループ分けになったわけです。労働組合関係はいわば社会党系でした。ですから、青年団関係と社会党関係との間の話で、社会党関係が先に決まりました。代表をこれにしたい、労組だから1人は確保したいということになって、あとの1人を誰にするかとなったわけです。最後まで残ったのが、社会党の青年部の部長でした。この丹治〔栄三〕さんですね。この方と、ここに名前は残っていませんが、後に藤沢の市長になった人です。海の平和祭を鎌倉ですとやっていて、それを世話してくれた地元の青年団の幹部だった人ですが、この人がぜひ行きたいと言ってなかなか譲らないわけです。僕が最終的に説得して、社会党系としてはこの齊藤〔正〕さんが行くから(県職の役員をしている人です)、2人ともではバランスが悪いので、1人にして欲しいと頼みました。ではその藤沢の人を選ぶかとなったときに、この運動は私のところのみんなが今まで地道に積み上げてきたのだから、もし社会党がこの人1人と絞るのであれば、あとの1人は僕が出ることにしたいと言った

ら、誰も反対しませんでした。

Q：成り行き上、それまでの経緯からして。

A：私がみんなを招待して集めたような感じですから。

Q：それは、関係者を全員一堂に集めた会議の場というものをやったのですか。

A：ありました。

Q：それは地元の神奈川ですか。

A：神奈川です。

Q：完全に地方ごとに絞ってくれとの依頼だったのですね。

A：そうです。神奈川はむしろそれだけの組織的な素地があった珍しい方です。地方はほとんど中心になる民青が弱小勢力で、あとは地評の関係というくらいで、まとまりが難しかったのだと思います、他の地域では。

Q：もめたという話はちらほらいろんな所に書いてありました²⁾。

A：ともかく行きたいという。

Q：行けるなら行きたいということですね。これは当時の新聞記事ですが〔毎日新聞の7月10日〕、全員に旅券は出せないと、まず50人、次に100人ぐらいまで譲る、その後には150人となるわけですが、もうこの時期には決まっていたのですね、神奈川は、今の話では、7月19日が出発なので、そうなりますね。

A：前か後かは分からないけれども、ともかくそのような時期に、先ほどの十数名のメンバーの中から2名の割り当てになってしまった、絞らざるを得ないのだという話をしました。最終的に2名のメンバーが決まったのは、私が民青の県委員会を招集して、慌ててカンパ活動をやらなければいけないとなったのは出発の2週間前くらいです。

Q：しかし、2週間前に決まっていたのは本当に珍しいと思います。

A：そうかもしれないですね。

Q：行けるか行けないか分からないまま、ずっと最後まで行っていたと聞いています。

A：最終的に参加したメンバーの中で、民青から出たのは私1人でした。

Q：全国の全体150名の中ですか。

A：ではないかと思えます。

Q：行かれた中で知り合いの方はいなかったのですか。

A：世界民青連に派遣されていたメンバー、あるいは合唱団かな、土方与平という……。

Q：土方さんは世界民青連の割り当てです。

A：与平が世話役をしてくれました。

Q：あの人は、語学の才で、モスクワとの連絡役だったと聞いています。交通会館の中に一室をもらって、直接国際電話をかけて交渉していたと聞きました。

A：これはご存じでしょうが、与平は土方子爵（与志さん）の男兄弟3人のうちの末っ子で、青年共産同盟の初期の段階からずっといて、むしろ主として中央合唱団の仕事をしてきました。それが50年問題の時に世界民青連へ派遣されて、それから民青連の上でも、フランス語、ロシア語、英語が達者ですから、相当便利な人としてまとめ役になっていたと思います。従って、派遣することになった日本代表団の世話役を彼がやったということになります。

Q：土方さんは昔からお知り合いですか。

A：私は青年共産同盟の当時からずっと一緒です。

Q：今、カンパという話がありましたが、25万円ですか。他の人から話ですが、1人当たり25万円が必要だったと聞いています。

A：記憶がないです。

Q：かなりの額だったということは書かれていますね。

A：当時の私の生活費は、1日にコッペパンを1つ食べるか食べないかというぐらいの生活をして、ようやく生き延びていたぐらいのことですから、そこに25万円という金額は考えられなかったでしょうね。

Q：カンパは割と快くというか、結構集まった、いろいろな方が協力してくれたと書かれています〔p. 232〕。それは心情としてどう言えばよいのか私には分からないのです。自分は行けないけれど、非常に貴重な機会で、外国へ行きます。その人を助けるためにお金を出すのは、当時の心情としては普通のことですか。

A：当時の民主青年団という組織は、今の民青とは綱領が違って、極めて革命的な組織でした。上意下達型の組織なんですね。そのリーダーである神奈川県委員長の私は、中央から派遣されてきたオルグという立場で、神奈川県の組織を再建する役割を果たしてきました。だから、私がこう決まると、もともと私が行きたかったわけではないけれども、皆さんとの話し合いの結果として、このようにせざるを得なかったのです。せっかく民青が一番根っここのところを切り開いて一生懸命やってくれたのに、社会党が2人行くということでは納得できないだろうということで、またご苦労を掛けることにはなるけれども、僕が行くということで話を決めたからと言ったら、みんな一斉に動いてくれました。

Q：では、親御さんや奥さまの職場からもカンパがあったと書かれていましたが、そのような人たちの心情はどうなのでしょう。民青の組織的には今の話で分かりますが……。

A：私の親とはずっと断絶状態でした。ほとんど出入り禁止のような、文通も、私の方から出しても返事をくれないという状況だったのが、あいつが外行するなんて寝耳に水で、親もびっくり仰天なのです。それでは背広の一着も買ってやらなければという、それこそ親心でしょう。

Q：やはりそこは洋行という時代なのですね。選ばれた者が行く所だから、それ相応のことをとということですね。

A：そこへ選ばれるということは、眞人がそのようなことになるということはずい出せだという、そのような時代です。

Q：そうした時代感覚が分かりにくいのです、世の中が変わったということで。お話をうかがいたいのはそういう点なのです。さて、出発にあたって背広と靴を新調されたそうですが、ちなみに当時どのような格好をされていたのですか。

A：一応背広らしきものを着たりしていましたが、仲間の連中が古着をカンパしてくれて、ほとんど古着です。

Q：先ほど、食事はコッペパンを1日1つだったというような話がありましたが、住んでいらっしゃる所はどこかに間借りをされていたのでしたよね。

A：神奈川県に派遣されて以後、共産党関係の宿舎があって、主としてそこに住んでいました。その後、民青が再建されて、地区委員会が幾つかできて、県委員会も一応でき上がるという段階で、県々で事務所を作りました。事務所と言っても全くのバラックで、東横線の反町の駅のすぐ近くの高架下です。

Q：うるさくて誰も寄り付かないという所ですね。

A：ちょうど土地の権利を持っていた人が仲間内において、半分貸してやるということになって、そこにバラックを建てて住んでいました。

Q：確認ですけども、ちょうど職も点々とされている頃ですね。平和友好祭に行かれる時は何をされていましたか。

A：印刷工でしょうね。というのは、横浜の印刷工の労働組合の人たちがだいぶカンパを集めてくれましたから。ここは非常に伝統のある組合です。印刷工の組織は、小説の題材になったこともあるくらいの面白い組織で、相当のインテリです。そういう人たちが、ずっともう戦前から伝統のある印刷工場革命を築いたメンバーが、私が印刷工になりたて、なりたてと言っても1年しか持ちませんでしたけれども、それを組合員として扱ってくれて、組合としてカンパ集めをしてくれました。

Q：仲間が行くからということですね。そうすると、職場をひと月ぐらい休んだことになりませぬ。

A：そうですね。

Q：どのような扱いだったのですか。

A：あのときは、神奈川新聞の印刷工場に入り込んでいた時かと思います。これはもう、何も話ほしないで、とにかく休ませてくださいますと休みました。

Q：150人の代表団の中で特にお知り合いはいなかったということでしたけれども、私の方で調べた国会での答弁の中でこのようなものがありました。モスクワ平和友好祭に朝鮮人の人がまず日本からモスクワに行って、その後、モスクワから北朝鮮に行きたいと準備していたが上手く行かなかったということをして社会党の田中稔男という国会議員が国会の中で質問で言っています³⁾。そのようなことを聞かれたことはありませんか。

A：全く知りませぬ。

Q：次は藤山外相がこの150人について言っていることです。日本の青年が世界各国を見て歩くことは決して悪いことではない。行って良い点も見つけるし、あるいは悪い点も見つけるだろう。ただ、日本の経済上、外貨の事情があるので、やはり適当な数に絞っていくことはやむを得ないと思う。青年諸君の希望は若干入れてやるということで判断をしたという答弁を、7月の末に（出発した後ですね）しています⁴⁾。今聞かれてどう思われますか。

A：先生の方が日本とソ連の外交の問題は詳しいとは思いますがね。恐らく、日本側もソ連と何らかの交渉を深めていきたいと思っていたという気はします。全く敵対関係という感覚は薄らいでいたのではないのでしょうか。先ほどの藤山の答弁も理解できる話ですね。要するに、正面切ったソ連の非難はやりづらかったと思います。

Q：ただ、500人はやはり多過ぎるということですね。

A：そのような言い方だと思います。

Q：実際行かれた人間として、500人という人数は多いと思いますか、もし500人行っていたら。

A：多いか少ないかは、日本の青年運動の実力から見れば、500は少し多かったかなと思います。やはり150ぐらいでちょうどよかったのではないのでしょうか。そこまでの運動の蓄積はないわけですから。先ほど言ったように、神奈川県などは飛び出しているくらいに蓄積のあった地域で、他にも平和友好祭という名前の祭典がぼちぼちとあちらこちらでやられていたとはいえ、民青中心でやっていたに過ぎなかった時代です。そういう土壌ですから、行きたいからがっつり集まった感じです。

Q：烏合の衆のような500人だということですね。

A：そうです。かえって統制が取れないのです。土方与平などは、本当にはっちゃきになっていました。わがままで仕方がない、全然統制の取れない烏合の衆をどうやってまとめようかという感じでしたね。思い出すのは、コムソモール側の、ソ連側の世話役が女の人と男の人と1人ずつ、2人責任者が派遣されて、ずっと行き帰りの世話役をしてくれましたが、しまいには怒り出して、「まったく日本人っていうのは始末のつかない、なんでちゃんと約束が守れな

いのよ」などと言っていました。明日の朝、何時にどこへ集まるというようなことがだらしない、遅れてくるのが当たり前というような連中で、その頃の組織力から考えると、まったく日本人はだらしが無い。だから、私の感覚としても、150人でも、運動の蓄積から見れば、これはあまりふさわしい代表とは思えないような者が、半ば観光的な感覚で行っている連中がたくさんいました。行ったことによる成果が後に日本の民主化運動にどの程度役に立ったかで評価すれば、私の感じではほとんど意味がなかった。それっきりで終わりです。

それからもう一つ。中心になった民青自体が、共産党のいわゆる50年問題のあおりを受けて、解散状態でした。私などは、常任で派遣されていたのに、非常任でいろいろな職業を転々としなければいけなくなった揚げ句に、組織自体が壊滅状態に陥って、今の民主青年同盟が再建というか、全然違う組織として生まれるわけです。中心になった民青自体がそういう状況ですから、民青にとっても私が行ったモスクワ祭が一つの山だったのでしょうか。それ以降はがたと地に落ちる状況になります。

Q：このとき一緒に動いた団体、例えば学生はどうですか。全学連も確か囂んでいるはずですが……。

A：恐らく、学生団体はその前にもう壊滅していたのではないのでしょうか、全学連も。横浜では、横浜国大の連中がある程度学生組織を維持していたように思うけれども……。

Q：あまり印象はないのですね。

A：例えば、前年にやった神奈川県内の平和友好祭の会場は横浜国大の講堂を借りてやっていますが、交渉をやってくれたのは横浜国大の民青の連中で、学生団体という印象はあまりありません。

Q：これは友好祭初日の入場式の写真です⁵⁾。これはどう見ても全学連だと思えるのですが……。

A：そうですね。自治会連合会ですね。

Q：だから、いることはいるのです。

A：いたでしょうね。

Q：いるのだけれども、組織できちんと動いて、活躍しているとは思えない。

A：要するに、全学連も名ばかりだったのだと思います。各地によって、民青の強いところがなんとか維持していて、一般の学生運動というものの比重は非常に下がっていたと思いますね。

Q：そのような時期なのですね。

A：だから、先ほどの水爆実験に反対する署名運動を始めることが新聞に載ったりした中に学生は出てきません。名前が出たのは、民青と杉並あたりの婦人団体です。労働組合もあまり最初は動かなくて、私の神奈川の連中だけで駅頭へ出てやりました。これが割と早い時期で、恐らく杉並の婦人たちとやり始めたのとどちらが早いかわかりません。

Q：別々に。

A：全然連絡なく。

Q：同時に起きていたのですね。

A：というぐらいで、記憶の中で学連というものは、恐らく横浜国大に学連はあったと思いますが、ほとんど民青の連中がなんとか維持していたぐらいで、学連自体としての運動はあまり力がなかったのではないのでしょうか。

Q：一応このように、名簿にも学生団体はあるのですが……。

A：これでも判断できるかと思うのですが、学生自治会連合会、全学連はこれ一人ですね。ほかに、地方の何々大学の自治会という形はありません。みんな寮だとか、戦没学生だとか、わだつみだとか、いわば学生が作ったいろいろな組織、エスペラントとか……、そういう形であって、かつてのような学連が実力を持っていて、学生組織を統合していたという実力はこの時代にはなかったと思います。

Q：各地にある小さなものが学生という形で集まっていたということですか。

A：そうだと思います。

Q：だから印象がないのですね。

A：これは忘れないようにしますが、押入れの中をいずれ整理したいと思っていまして、その中に平和友好祭のお土産がいろいろと残っています。

Q：知っています。

A：一番のお土産がバッチです。

Q：私ももらいました。別の方が、布きれにバッチを付けて、取ってありました。

A：それが50個ぐらいあります。各国代表団と交換するのです。

Q：常識的にはバッチと絵葉書ですね。

A：絵葉書とか、写真の類いですね。

Q：あちらでもらった本や写真集はどうですか。

A：そのようなものはどこかにしまってあるだろうし、これを書くのも何かの資料があって書いたはずなので、一応取ってはありました。それを整理する意味合いもありましたので。

Q：これを書いたから、もうこれでいいかということは分かります。

A：もう一度、今日お会いするに当たって、場合によっては整理し直そうかとも思っていました。

Q：また何か機会があれば、お願いします。では、話を次に行きたいと思います。日本から出られるときは、東京から新潟に行って、そこから船ですね。

A：そうですね。

Q：東京駅の見送りはかなり盛大だったと聞いていますが、あまり印象はないですか。

A：私は郷里が新潟です。親兄弟がみんな新潟なので、前の晩は実家に泊まっただろうと思います。波止場まで両親と女房が送りに来ただけで、それ以外の見送りはありませんでした。それから、代表団の見送日も、新潟の波止場でもそれほど盛大な見送りはありませんでした。あることはありましたが、あまり記憶にありません。

Q：ないのであれば、そうなのだと思います。何が記憶に残っていて、何が残っていないのかを確認したい。それが面白いのです。船の中で何か印象に残っていることはありますか。新潟からだとも1泊2日ですね。

A：モジャイスキーという新造船ですね。

Q：よく聞く話は、船の中はロシア料理なので、パンが噛めなかったとか、硬かったとか、そのような食事の話はまず聞きました。ロシア料理がなかなか大変だったという話です。

A：私にとっては、何だって食べられればありがたい話で、それはもう最大限のごちそうでした。

Q：逆に言うと、何もやることがないのではないですか。普段なら色々な形で動いているのに、船など、移動している間は、食事は出てきて何もなくていい。船なり、電車の中なり、移動の間は何をされていたのですか。

A：同室になったのは、全国印刷労働組合の青年部の部長をしていた人と、もう一人、どこかの労働組合の出身の人と、私と、三人で一部屋でした。

Q：船ですか。

A：船からずっと、列車に乗って、行き帰りずっと一緒でした。これは、全国の実行委員会、派遣委員会が全部その組分けをしたようで、自動的にその三人のグループでした。その中でのおしゃべりぐらいのものですね。

Q：別の人の話では、移動中も会議があったと聞きましたが……。

A：これはあったと思います。ただ、それは土方与平などが各団体の首脳部を集めて打ち合わせをしたという、代表団の中の指導部の会議ということです。

Q：そのようなところには関係されていなかったのですか。

A：私のところはありませんでした。

Q：事実上、150人の中では平の、あまり責任のない人だったのですか。

A：そうです。

Q：それはよかったですね。

A：一参加者です。

Q：それは非常によかったですね。

A：与平はしきりに呼びに来ましたが、僕は拒絶していました、嫌だと言って。当時の感覚で言うと、その土方与平自体がまずそうなのですが、何しろお殿様、華族様ですからね。青共以来ずっと一緒ですが、それはそれは皆さんから大事にされました。華族の土方与志さんの息子で、ロシア語、英語、フランス語がべらべらだということで、青共の文化部長を務めたり、合唱団の団長を務めたりという人です。この頃には世界民青連の役を担っていました。だから、われわれとは別格の人で、「長崎、ちょっと手伝えよ」と来るのだけれども、「嫌だよ」と僕は言っていました。

Q：休憩ですか。

A：そうです。

Q：この本の中で面白かったことが、一度警察に捕まっていたらしゃいますよね、小林多喜二と同じ房に。あのときに、捕まっている間に実は太ったという話がありました〔pp. 192-5, 197〕。モスクワ行きもそれと同じかなと思いました。日常の活動の厳しい中に、一瞬だけある不思議な休憩の時間といますか。

A：そうです。僕自身は行きたいという気持ちは全然ありませんでした。ソ連邦、あるいは共産党のコミンテルン以来の歴史、あるいはレーニンの図書といったようなものは、これはもう金科玉条でした、当時のメンバーにとっては。だから、私はくまなく読みほしていましたし、革命のなんたるかは一番の関心で、レニングラードの蜂起などにも夢を抱いていたような人生観ですから、遊びに行こうなどという感覚は全然ないのです。突然天から降ってきた休憩時間のような感覚です。先ほどのお話と似たり寄つたりの感覚です。

もう一つは、これは僕ができれば先生からいろいろと当時のソ連共産党が崩壊する時期のお話をぜひ詳しく教えてもらいたいと思っているのですが、この時の私の頭の中では全く社会主義の故郷でした。

Q：そのように書かれていましたね、この中に〔p. 238〕。

A：理想郷であって、一点の非の打ちどころもないわけです。そうした夢の理想郷と思い描いて、そこへ行って、一カ月ほどお休みが取れる。こんなことは私の人生にとっては夢のような話です。

Q：聞いていると、竜宮城に行っているようですね。

A：そうです。だから、土方与平などが何かを頼むよと言ってきても、嫌だよと。

Q：そうすると、移動中は休憩だとして、これはみんなおっしゃっていますが、駅に着くたびに歓迎会がある。すごいですね、あれは。一番最初のナホトカの港から信じられないぐらいの人が来ていて、その後もずっと駅に着くたびに歓迎の式典がある。人によっては花束をもらい過ぎてどうしようとか、握手をし過ぎて手が痛くなったとか。それはやはり同じですか。

A：はい。これは、僕は少し不思議な感じを持っているのだけれども、その後、ソ連共産党が崩壊して、ソ連邦が現状に至るような歴史を経るわけですが、このときの私の感覚ではそのような兆しは全く見えませんでした。

Q：まだこの時期はありません。

A：そして、一般の民衆の皆さんにしても、極めて素直に日本からの平和代表团だということで、それぞれドルージュバ、ミール・イ・ドルージュバの気持ちで迎えてくれました。

Q：ただ、動員は掛かっていますね。動員は掛かっているのだけれども、来ている人が何のために来ているかという、ある意味、外国人を見たいのです。見たことがないので、外国人とはなんだろうという感覚もあって、物見遊山で集まったという面はあったようですね。

A：なるほどね。あとは、コムソモールなりピオネールなりの組織動員が極めてうまくできていたということでしょうね。

Q：しかし、動員と言われても、強制ではないですね。

A：そのような感じはしなかったですね。

Q：面白い話が来たから行ったということでしょう。あと、この中に書かれていて初耳だったのですが、ダンスをしたと書かれていました [p. 234] が、あれは何回もあったのですか。

A：ほとんど駅ごとにありました。全部楽隊が付いていて、僕などが降りていくと、若い女の子が飛び掛ってくるのです。そして、熱烈なキスをほっぺたですけれども受けて、そのまま引っ張っていくのです。

Q：みんなの輪の中でこのようにやれと言うわけですね。

A：そうです。それを日本の代表团の中で受け止められる人がほとんどいませんでした。

Q：引っ張っていくということは、女の人が男の人を引っ張るのですか。

A：そうです。みんな嫌だと言って引っ込んでしまうわけです。そうすると、もう仕方がないという感じで僕が円陣の中へ引っ張り出されて、それこそいい見世物です。それが一応素養としてあったのは、出発点が農林省の農事試験場なのですけれども、サークル活動で、それこそ地下足袋を履いて社交ダンスを

やっていました。その経験が一年くらいあったので、一応は社交ダンスが何たるかは分かる。でも、それ以後は何もやっていないし、初めてのことで、まして外人の娘さんに引っ張り出されて、これはよほどの覚悟がなければできません。

Q：駅の停車時間は30分ぐらいだと思いますが、聞いていると、がっと引っ張り出されて、そのような歓迎会をやって、また乗ってさっと去って行くわけですか。

A：そうです。

Q：慌ただしいですね。

A：停車駅が、モスクワまで一週間かかったのですけれども、その間、一日に二つ三つ停まりますし、夜中に停まる所もあるわけです。

Q：夜中にドンドン叩かれたと書いてあって [p. 235]、すごいなと思いました。

A：寝る暇がないくらいでした。ほとんど他の連中は、「嫌だ、もう俺は出ないよ」と言っていました。

Q：それでモスクワに着かれるわけですが、モスクワではホテルが非常に豪華で、帝国ホテル並みだった、しかし、帝国ホテルに行ったことはないのだけれどと書いてあり [pp. 235-6]、この辺は面白かったです。ホテルは何人部屋でしたか。同室は何人いらっしゃいましたか。

A：やはりその三人のメンバーだったと思います。

Q：人によっては五人部屋だったというのですが……。

A：三人としか記憶がないですね。

Q：いろいろな可能性があると思います。あとは、少し細かいことですが、お風呂やお便所はどうなっていましたか。

A：部屋ごとにありましたね。

Q：その宿はアジア系の人の宿舎だったそうですが、他の国の人のことは何か覚えていらっしゃいますか。確か、インド、インドネシア、その辺りと同宿のようなのですけれども。

A：そうでもないと思いました。

Q：ホテルはオスタンキノで、目の前が博覧会の会場ですが、あまりそのような外国人のことは記憶にないですか。

A：はい。食事は、いわゆるバイキングでしたね。

Q：バイキングで、食券があったと聞きました、朝昼晩と。あと、たばこ券があったとも聞いています。

A：豪華版の食事でした。

Q：かなり満ち足りた生活ということになりますね。

A：そうですね。 (以下、次号)

注

- 1) http://www.machida-zeikei.sakura.ne.jp/n04_history (2016年11月9日最終閲覧)
- 2) 一例だが、「モスクワ友好祭渡航劇始末記」『週刊新潮』1957年第30号、62～63頁。
- 3) 衆議院外務委員会議事録第26号 (昭和32年7月31日)、19頁。
- 4) 衆議院外務委員会議事録第26号 (昭和32年7月31日)、13頁。
- 5) この写真は、タス通信の配信で、毎日新聞や日本経済新聞にも掲載された。